

日本老年社会学史学会平成14年度大会「社会的現実の多様性と経験的調査の軌跡」

「地域社会の持続と再編： 地域高齢化と社会学的調査」

九州大学大学院人間環境学研究院 教授 小川全夫

## アブストラクト

日本の地域社会についての調査研究は、都市 - 農村の二分法発想の下に、農村社会学、都市社会学というそれぞれの連字符社会学の名で論議され、今日では都市 - 農村連続体発想の地域社会学という構想のもとで展開している。しかしながら、農村社会学も、都市社会学も、決して部分社会としての地域社会に関心を寄せていただけではなかった。1960年までの日本社会そのものが農村的社会であったために、農村社会学はそのまま日本社会全体を論じる戦略的な方法論であった。またその後の高度経済成長下で都市化する地域を扱った都市社会学は、日本社会全体の変動そのものを論じようとしていたといえる。

都市化が日本全体に広がった段階で、居住や職業や日常生活圏の現実を調査研究する場合、農村と都市を二分法的に捉えるより、連続体として捉える方が有効であるという認識の下に、地域社会学という構想が展開する。そして、日本社会がいろいろな意味でボーダーレス化する今日、農村と都市を分けて、それらを独自の研究対象とする社会学的考察と、農村と都市を連続体として論じる方法論は、果たしてどれだけ地域社会の現実を論じる時に有効といえるかを問わなければならない。

日本社会不変の構造を明らかにしようとする社会学の方法論は、「構造」に強い関心を寄せ、階層構造やいえ・むら構造や人間生態学的構造を明らかにすることで金字塔を打ち立てたといえる。そして、関心が日本社会の都市化の解明に移ると、方法論としては「過程」に強い関心が寄せられ、共同体の解体過程や再編過程や社会移動現象に焦点を当てた調査研究が進められることとなる。しかし、今日、「構造」という面では人口構造の問題、「過程」という場合には少子高齢化の問題が、これまで以上に重要な問題提起をしている現実にある。地域社会の人口高齢化という現象に即して調査研究するという事は、日本社会全体の人口高齢化の中で、地域の現実が多様であることを認識する枠組みについて再検討を迫るものである。